

目次

はじめに 1

ヨット〈きらきら丸〉航海図 1 8

航海図 2

10

ヨット〈きらきら丸〉主要諸元 12

第一章 南の島旅……島伝いに沖繩へ九〇〇キロ

……………

13

一. 南の島へ秋風にのつて 14

二. 山海留学 21

三. 悪石島は高原の島 26

四. 一番遠い吐噶喇の島、宝島 35

五. 奄美の島唄 41

六. 離島の救急医療 47

七. 旧暦を生かす沖繩 55

第二章

熊野と瀬戸内……歴史ある港はひと味違う……

63

一 初釣果 64

二 城下町、田辺 73

三 鳴門海峡へ 80

四 日生名物と庭園美術館 85

五 故郷の海 96

六 海のお遍路 101

第三章

九州一周……豪雨つづく夏をゆく……

113

一 玄界灘は雨と霧 114

二 焼酎と歴史の島 121

三 梅雨が明けない 127

四 やつと夏らしい大隈海峡 140

五 台風はどこにいる 153

第四章 北前の海……北前船の航路をたどる

157

- 一. 金子みすゞの海、仙崎
- 二. 湯治とヨットクラブ 165
- 三. 若狭の人 172
- 四. 日本海帆走 180
- 五. 東北の土地柄 192

第五章 最果ての短い夏……北海道には千変万化の海があった

205

- 一. ヤマセ 206
- 二. 積丹半島まわり 214
- 三. さらに北へ 220
- 四. 最北端、宗谷海峡 229
- 五. 静かなオホーツク海 239
- 六. 国境の海 247
- 七. 濃霧の海を二週間 255
- 八. 函館のヨット専用泊地 266

第六章 伊豆の海へ……人情厚い三陸が遠ざかる

271

一. 心休まる三陸の港 272

二. 急ぎ足に 283

三. 淡々と終止符 289

旅の生活費 298

別表 301

あとがき 302

表紙・カバーデザイン監修

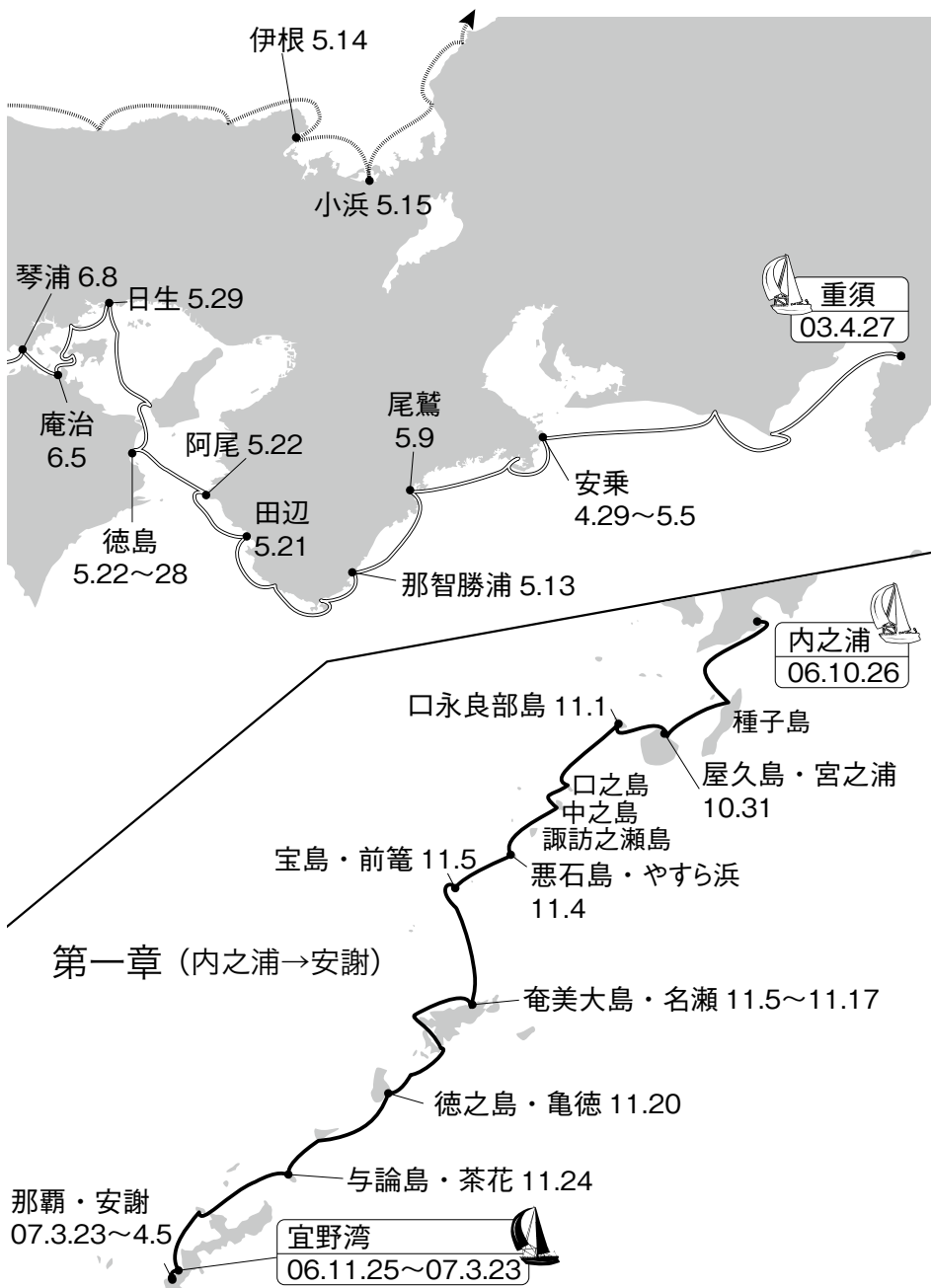
竹田 壮一朗

本文デザイン


CANデザイン


表紙カバー写真 撮影 著者

—は第一章、—は第二章、…は第三章、—は第四章の航路を示す



ヨットきらきら丸 航海図 1

 = 出発地

 = 到着地

第四章 (下関→松前)

温泉津
4.30~5.5

境港 5.10

仙崎 4.28

本島 6.9

対島・
巖原 7.31

 下関
04.4.25

下関
7.9

伯方島・有津 6.13

吉岐島・
郷ノ浦 7.28

齋島 6.16

多度津
6.11

平戸 8.7

呼子
7.25

 武蔵
03.9.23

 武蔵
03.7.2

 別府
03.6.26

野母 8.18

長崎
8.16

佐賀関
03.6.23~26

日振島

天草下島・
崎津 8.20

上甌島・里
8.23

蒲江 9.16

第二章 (重須→別府)

宮崎 9.14

下甌島・長浜
8.24

山川 8.30

硫黄島 8.31

屋久島・宮之浦
8.31~9.5

第三章 (武蔵→武蔵)

函館

04.8.25



ヨットきらきら丸 航海図 2

—は第四章、—は第五章、—は第六章の航路を示す

大畑 8.26

八戸 9.2

釜石
9.4~10

稚内

利尻島・沓形
7.14

東浦
7.18

利尻島・鬼脇
7.12

天塩
7.10

天売島 7.7

焼尻島 7.6

文吉湾 7.24

来岸 6.29

紋別 7.20

増毛 7.5

羅臼 7.25

根室 7.30

奥尻
6.26

小樽 7.5

釧路 8.6

花咲 8.1

瀬棚 6.27

江差
6.25

三石 8.10

檜法華 8.15

松前

04.6.12





函館

04.8.15~25

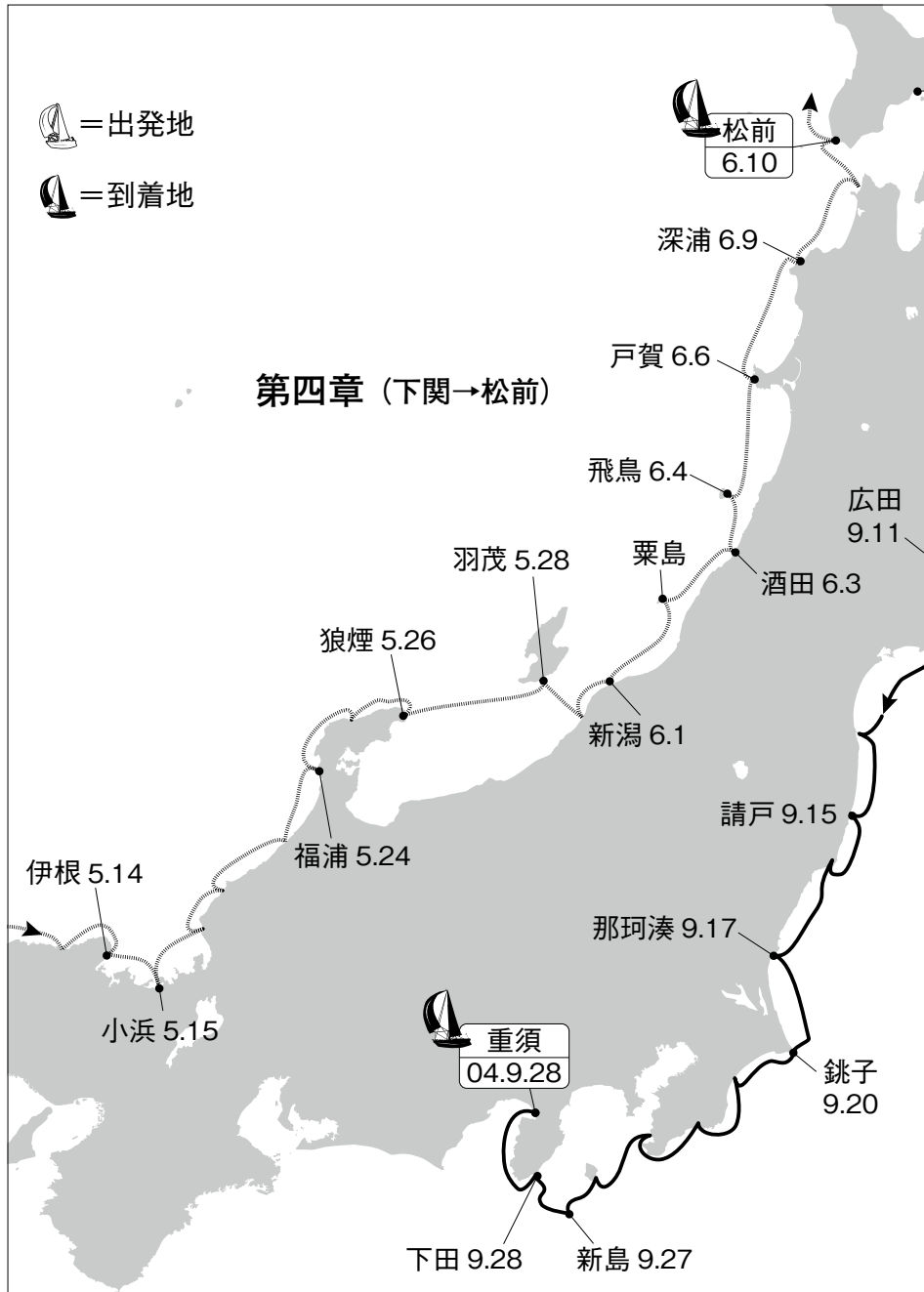


第五章 (松前→函館)

 = 出発地

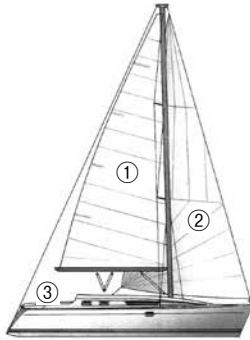
 = 到着地

第四章 (下関→松前)

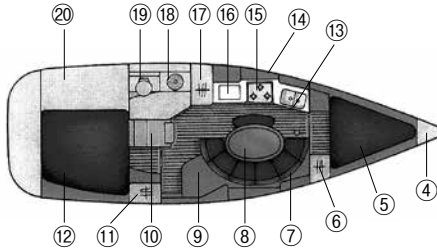


第六章 (函館→重須)

- ① 主帆 (メインセール)
- ② 前帆 (ジブセール)
- ③ コクピット
- ④ アンカー収納
- ⑤ 前室ベッド
(食品庫などに使用)
- ⑥ ロッカー (物入れ)
- ⑦ 戸棚 (食品など)
- ⑧ テーブルとソファ
(ソファの下は収納庫)
- ⑨ チャートテーブル
(電子機器操作)
- ⑩ 階段
(下にエンジンルーム)



- ⑪ 後部ロッカー (書類、電子部品用)
- ⑫ 後室二人用ベッド
(半分を衣類、本、海図置場)
- ⑬ ダブル・シンク
(清水と海水、2蛇口)
- ⑭ 調味料、食器戸棚
(下は器具入れ)
- ⑮ 2口ガスレンジ
- ⑯ 電気冷蔵庫 (上は調理台)
- ⑰ キャビンロッカー
(部品庫に使用)
- ⑱ 洗面 (シャワー付き)
- ⑲ トイレ
- ⑳ デッキ・ロッカー
(予備ロープ、燃料から自転車まで)



ヨット〈きらきら丸〉の主要諸元



型 式	_____	_____ ジャノー・サンオデッセイ34.2
全 長	_____	_____ 10.3m
全 幅	_____	_____ 3.29m
喫 水	_____	_____ 1.40m
重 量	_____	_____ 4.650kg
エンジン	_____	_____ ヤンマー3GM27hp
燃料(軽油)	_____	_____ 110リットル
清 水	_____	_____ 165リットル
メインセール	_____	_____ 24.6㎡
ジブセール	_____	_____ 31.0㎡
定 員	_____	_____ 8名

図版とデータ提供：オデッセイマリン(株)

第一章

南の島旅

島伝いに沖縄へ九〇〇キロ



吐噶喇列島最初の島、口之島が近づいてきた。

一・南の島へ秋風にのって

台風シーズンに出航

九月の三連休だというのに、浮き棧橋から早々と人影が消えてしまった。

静岡県駿河湾の一番奥にある重須おもすヨットハーバーは、串刺しの専用棧橋が並ぶ高級マリナーではないが、漁港の一角に定置アンカーロープを張り巡らせて、漁協と契約して沖がかりで留めているだけのヨット専用泊地で一三〇隻ほどが繋がれている。私が住んでいる横浜からは約一一〇kmあり少々遠いが、その分、係留費用が三浦半島などの三分の一で済み、東京郊外の青空駐車場代と同じぐらいなので、昔から人気がある。それに、海は東京湾や相模湾よりも断然きれいだ。

沖繩を直撃した台風一三号が、前夜九州を襲って今日はこちらに近づき、海は風雨がひどいと予報を繰り返すので、連休を楽しみにしていたヨットの人たちも早々に引き揚げ始めた。

ヨット乗りたちが帰り支度をしている隣で、沖繩への航海荷物を積み込んでいる私を見て、「わざわざ台風シーズンに出ていくの？」

あきれ顔で尋ねられたが、「向こうみずだねえ」とまでは口にしくなくても、なにを考えているかさっぱりわからないという表情がチラチラのぞいている。説明するのも面倒だから笑って済ま



〈きらきら丸〉が動き出し、沖縄まで2000kmの航海が始まった。(田村昌男氏撮影)

せたが、もちろんそれには理由がある。

たしかに台風シーズンの最中だが、九州までの太平洋岸には深い入り江の港がたくさんあって、台風避難に不自由しない。ところが、鹿児島から沖縄まで島伝いの約八八〇km、この間に台風避難ができるのは三ヶ所ぐらいしかないのだ。それで、南西諸島を台風が通過しなくなる一〇月中旬以降なら安全だと見立てた。

秋航海の理由が、実はもうひとつある。

昔の琉球りゅうきゅう（現在の沖縄）交易の航海のことだ。

琉球は、中国大陸、日本との三角貿易の継地として栄えたが、日本との交易は春になって南西風が吹き始めると、交易船は九州をめざして北上し、秋の北東風をまっぴら琉球に戻った。季節の風に従って一年にひ

と航海する交易だった。太平洋沿岸では秋は北東風が吹く日が多く、重須から沖繩までは南西に向かつて進む航路だから、帆船であるヨットが航海するのに一番好都合だろうかかねてから思っていたので、それをやってみなかった。

台風一三号の影響はなかったが通過すると南風が強まり、うねりが重須まで入り込んできた。都会では、台風が去ってしまえば、台風一過の洗濯日和というけれど、海は通過後も高波が一日か二日続き、船出は自重しなければならぬ。

こうして三日間、誰もいない浮き棧橋でのろのろと荷物の片づけをし、それでも身を持ってあまりして掃除にいそしんで時間を使う。南風が吹き込んで、じとっとする夏の熱気がいつとき戻ってきたけれど、港の後に控える弁天島の緑はどことなく秋めいて少し弱々しくなっていた。

三年の空白は長すぎた

二〇〇六年九月二〇日、ようやく重須を出発して駿河湾を南下し遠州灘に向かった。

ところがインターネットの台風情報では、なんと、もう次の一四号台風がはるか南の硫黄島辺りで北に進路を変え始め、九三五ヘクトパスカル（以下、略号Paを使う）という超大型台風になってきた。台風が北緯二五度の小笠原諸島近海にくると、避難しなければならぬ。

この台風は真北に進んで伊豆諸島から関東に接近しそうだから、台風が近づくと前に遠州灘を西に渡って志摩半島に待避した方が安全だろうと見込んで急ぐことにした。

超大型台風一四号は九一五kmまで最大級に発達して、関東地方に大きな被害をもたらしたが、志摩半島の的矢湾入り口にある安乗で台風之余波がおさまるまで六日間も日和待ちを強いられることになった。近年、超大型台風が発生しやすくなっているが、台風一四号はそのなかでも超のつく台風だった。

安乗港の漁協の魚直売所でイサキとカワハギを一匹ずつ求めて四〇〇円。

「刺身になりますか」

「ダメ、ダメ、これは地物だから」

店番のおばさんに塩焼きを勧められたが、地物とは的矢湾入り口の左右に構えている定置網にかかった魚のことで、毎朝、夜明けに船を出して網から揚げてくる。刺身用は小舟で手釣りしたものだけを呼ぶそうだ。

二匹とも二枚におろし、イサキの半身、カワハギの半身をお造りにして、秋風が船内の熱気を吹き払ってくれる夕べ、燗酒で味わった。

翌日、イサキの残りは塩焼きに、カワハギの残りは、頭も骨もぶつ切りにして、ワタを溶かし込んでみそ汁に仕立てた。イサキは刺身には無理といわれたけれど、皮を剥ぐと一息にきれいに引けて、都会のスーパードで売っている刺身用など足下にも寄れない鮮度だ。それぞれによかったが、カワハギのみそ汁が一番だったと思う。